

大人になるということ

— 成人の日によせて —

(コリント一三・一)

明日は成人式。日本中で約一二三万人が大人の仲間入りをする。その中にはひねり王子こと白井健三選手（体操）、最近おしやれに目覚めたと思しき高梨沙羅選手（ジャンプ）、そしてあのべつびんさん（芳根京子）もいる。そう思うと「年をとったなあ」と思わずにはいられないのだが何時のころからか成人の日にどうしようもないニュースが繰り返されるようになった。「やらかす」若者が各地で続出するのだ。イッキ飲みのみ末式場で酔いつぶれるもの、式辞を聞かずにスマホ片手に写真撮影に興じるもの、果ては新成人が拡声器をもって壇上に乱入し、式を妨害し警官に取り押さえられるものなどなど。まったく先が思いやられる新成人たちではある。閑話休題。聖書はクリスチャンを新しく生まれた者といっているが、生まれたからには育つのが当たり前である。今日は霊的成熟と云うことについて三つの事を考えたい。

一、賜物と成熟との関係

コリント一三章は結婚式などでと

みに有名な個所であるが、元々はコリント教会に起こっていたある問題についての議論の中で書かれたことを覚えねばならない。それは一・一にあるように御霊の賜物とその使用に関することである。パウロはコリント教会を賜物豊かで、かつ熱心だと評しているが（参：一・七）、彼らの中には熱心のあまりだろうが、異言などの御霊の賜物を乱用し、礼拝が混乱しているという状況があったようである。また一つの賜物を尊ぶあまり、それをもっていないものを軽視したり、排除したりということが起こっていたように見える（一・二・九）。おそらく混乱を引き起こしていた者たちの中には「わたしはこんなにすごい賜物を頂いているんだぞ」といってそれをひけらかすかのように発揮して礼拝を混乱させていた者が居たのだろう。そんな彼らに向かつてパウロは異言や預言などの御霊の賜物をいくらもついても、もし愛がないなら一切はむなしと喝破するのである。要は賜物の寡多と霊的成熟の間には直接的な相関はないとパウロは考えているのだ。

二、成熟の表れとしての愛

ならばパウロが成熟の証としたものは何だろうか。「愛（アガペー）」である。だがここで注意したいことがある。まずパ

ウロの説く愛はいわゆる「惚れた腫れた」の瞬間的な感情のスパークとは異なるということである。それは七、八節あたりにある「がまんする」「耐え忍ぶ」などの動詞を見ればこれ以上なく明らかである。聖書の愛は持続的・継続的な性質を強く持っているのだ。次にここでの愛は行動と深く結び付いているということも言える。考えてみよう。その人が親切なことを親切な行い抜きに知ることには難しいだろうし、相手の利益のために実際に自分を犠牲にするという行動なしに、その人のうちに愛があることを知ることは出来ない。このように考えていくとき、キリスト者の生活の中に現れるアガペーの愛こそが信徒の成熟をはかる最もふさわしい秤であるという言説には十分な説得力があるのだ。

三、成熟と決意

それではどうしたら人は愛を実践し、成熟を表すことができるのだろうか。鍵になるのは一節である。そこには「大人になったときには子どものことをやめました」とある。ちなみに口語訳では「幼子らしいことを捨ててしまった」と訳しているが、これは誤解を招きやすい。「捨ててしまった」では「ごみと一緒に指輪を捨ててしまった」のように幼子らしいことには価値があるように思えてしまうからであ

る。パウロの意図はむしろ逆。霊的に成熟を目指している使徒パウロは未熟な子どものように自分の賜物を好き放題にひけらかし、キリストのからだを痛め、壊すことを後ろにおいて（「やめる」の直訳）キリストがしたように他者のために生きる、すなわち愛することを断固たる決意をもって選び取ったというのだ。そしてこの決意こそ霊的成熟への第一歩なのである。

* * *

かのイチローとメジャー同期生にして十年連続で三割、三十ホーム、百打点を達成した、これまたイチローと共に現役ながらも遠からず野球殿堂入りが確実になっている数少ない選手の一人がアルバート・ポホルス（現エンジェルス）である。

独特の打撃フォームは理想の体現と言われ、守備でもゴールドグラブ賞を獲得、昨年（2016年）の年棒はなんと二九億円に達した。しかし彼はその名譽と富に戯れることを断固拒否。反対に彼はバット一本で稼いだお金で多くのダウン症児を支援する非営利団体を立ち上げている。そのウェブサイトに彼は彼の人生の目的は救い主イエスに栄光をもたらすことであり、野球はその道具にすぎないことが明記されている。彼の信仰は決意と愛の行動によって今も成長中。友よ、あなたはどうか。